「納戸のなかの明治維新」を読んで

会員　内山英雄

昭和六一年三月末の毎日新聞山口版の一隅に『玖珂文化』（「玖珂文化の会発行」）という冊子の内容紹介に「納戸のなかの明治維新」という目次を見出し、好奇心も手伝って早速購読した。執筆者は東京在住の矢島信子さんである。

その概要は長い海外生活を終えて息子が帰国したのを機会に住宅を新築し、新居に移転するにあたってこの際不要品は一切処分することにした。その時納戸の奥に一度も開いたことのない茶褐色の鉄製の衣裳箱があった。この箱も処分せねばと考えたがいざ処分することになるとぜひ開いて見たいと思い息子に開かせることにした。私は中を見たいと思いその場に居たが、開く瞬間、何か気味悪くなり急に其の場を離れた。後になり聞くところによると中に四基の位牌が納められてあり、その一基の位牌の戒名に

清翠院殿忠応道義大居士

（裏面）

元治元年十一月十二日藩公の為め尽忠自害、

俗名　国司信濃　行年二十四歳

とあったとのこと。矢島さんの言われるには「この若い御家老はどのような思いで何処の地にて果てられたのであろうか、又このことについて御存知の方は御一報を頂きたい」とのこと故不勉強ではあるがことのあらましを報知した。

後日私は「国司親相幽閉賜劔之地」の標石のある徳山御弓町に足を運んだ。その時意想外に思ったことは標石は民家の古びた板垣の間に僅か見つけられる程で惨めに思えた。禁門の変の責を負うて自刃した若武者の御家老様が民家の板垣の隙間より御顔をのぞかせて居られるようで時代の移変の激しさを感じた。

さて国司親相が幽閉せられ自刃したのは、御弓町の澄泉寺であるから位牌もこの寺に納められていたことと考えられる。この位牌が奇しくも矢島家の衣裳箱に納められてあったことの経緯を素人なりに考えて見た。実は『玖珂文化』へ寄稿された矢島さんの夫君の祖父にあたる人が矢島作郎である。「都濃郡誌」の下松町の人物編に矢島作郎の事績が掲載されている。それによると「元徳山藩士にして天保十年徳山に生まれ幼より和漢の学を修め夙に勤王の志を懐きて維新の際東奔西走国事に鞅掌（おうしょう）し或は幕府のために板倉藩に幽囚せられ居ること三年或は長州再討の兵と戦う等

困苦辛酸を嘗め奉公の赤誠を尽せり、明治元年春英国に航し海外の事情を探究し特に諸名士に就きて経済学を修め業務を実地に研究せり。本邦政府の創めて独逸に於て紙幣を製造するや往て之が監督に当り後欧洲各国を巡遊し明治七年帰朝し直に紙幣助に任ぜられ後十年官を罷め野に下りて実業に従事し東京貯蔵銀行、東京電燈会社、京都電燈会社、神戸電燈会社等を設立し或は選ばれて社長となり、孜々経営、邦人をして電気業の効果を知悉せしめたり。今日電気事業の勃興を見るは実に氏の力尠しとせざる所なり。其他山尾子爵等と謀り東京訓盲唖院を設立し、又子爵渡辺昇、大野直輔等と共に東京正則英語学校を創立する等功績没すべからざるものあり。二十四年九月選ばれて衆議院議員となる。同年居を下松宮の洲にトし地方実業の進歩を図り或は公共事業に尽瘁し傍ら和歌を好み風月を友とし時に地方歌人の遺稿を自費を以て印刷発行してその縁故者又は同好の人に頒つ等常人の企及せざる所を行い四十一年宮中御歌会に陪席被仰付たる如きは氏の光栄至大と謂うべし。四十四年十一月没す。年七十三」とある。

徳山で生まれた矢島作郎は維新の志士であり、明治の先覚者かつ実業界の大立物であったが、東京と下松の生活が長かったため徳山には馴染がうすかったようである。

次に澄泉寺のことであるが、これも「都濃郡誌」下松町の寺院の部に澄泉寺は「臨済宗にして徳山大成寺の末寺なり、本尊は観世音菩薩にして往時徳山下御弓町の頭にありしも後明治三年五月大成寺境内に移し明治三十六年九月東豊井字宮の洲に移せり」とあることから、当時周防で名声の高かった矢島家によって宮の洲に移転されたと考えられる。従って国司信濃の位牌も宮の洲に移されたが、矢島家の東京転住により信濃の位牌も東京に移り矢島家の納戸の奥深く久しく眠っていたのではあるまいか。現在国司信濃の位牌は、東京の矢島家の菩提寺である光林禅寺に預けてあると矢島信子さんの書簡中に書かれている。

終りに矢島の姓のことであるが徳山城下町古図に矢島姓は出て来ない。伝聞するところによると作郎は藩士伊藤家の生まれであって世子毛利元功に随行して英国に留学するにあたり期するところがあって日本の古称の大八州の八州（矢島）に改姓したという。作郎の雄大な心意気が偲ばれる。